

主 題：キリストにあって歩む

聖書箇所：コロサイ人への手紙 2章1－7節

皆さん、ここ1週間ほど、テレビや新聞でアルジェリアで起こった事件を見聞きしていただろうと思います。残念ながら10人の日本人の尊いいのちが失われました。恐らく今回お亡くなりになったひとりひとりは、そのようなことが自分の身に起こるとは考えずにあの遠いアルジェリアでの仕事をなさっていたのだらうと思います。私たちにはあすのことも、またきょうこれから起こることもわからない、これが事実だと思います。私は今回のこの事件を自分で考えて、1秒先に自分に何が起きるかわからない、私たちクリスチャンが一番大切にしなければいけないことは、今この時、常にキリストとともに歩む、そのような生活をしなければいけないと知らされました。きょうは皆さんと一緒にこのコロサイ2：1－7で、そのことをもう一度学んでみたいと思います。

1. 序論

A. コロサイ

- ① コロサイは現在のトルコにあります。今回の事件のアルジェリアから地中海を隔ててそんなに遠いところではありません。コロサイの場所ですが、エーゲ海に面した港町のエペソから陸の方へ160キロ入ったところにある町です。
- ② この町に教会が誕生したのは、パウロが三回目の伝道旅行をした時であろうと言われています。その時パウロはエペソにおりました。だから大体西暦55年ぐらいにこのコロサイに教会が作られたと言われています。そのことは使徒の働き19：1、あるいは19：9－10を読んでいただければ理解できるかと思います。

B. コロサイ人への手紙

- ① このコロサイ人への手紙を書いたのはパウロです。
- ② そしてこれはパウロがローマの獄中から書いた手紙であると言われています。パウロはこの手紙を牢の中から書いたのです。ほかにも獄中書簡が三つあります。パウロは四つの手紙をローマの獄中から書いたと言われています。エペソ人への手紙、ピリピ人への手紙、そしてこのコロサイ人への手紙と、もう一つピレモンへの手紙です。
- ③ 2：1を見ると、パウロはどうもコロサイに行ったことはなかったようです。だからこのコロサイの教会は、エパfrasという人物が中心となって建て上げたと考えられます。
- ④ そのエパfrasが、コロサイの教会の人々の様子をローマにいるパウロに知らせました。パウロはコロサイの人々の様子を聞いて非常に感謝したのです。それは1：3－5に書かれてあるとおりです。パウロはコロサイの人々のキリストに対する信仰、また希望、そしてほかのクリスチャンたちに対する愛を聞いて非常に喜び、また神に感謝をしました。

C. コロサイの教会の問題点

- ① このコロサイの教会には異邦人が多かったので、コロサイの人々はクリスチャンになったと言ってももまたもとの教えに戻るという危険性がありました。
- ② もう一つ大きな問題がありました。それは、異端の教えです。現在もあります。この異端の教えがコロサイの教会に入って来ていたのです。だからパウロはエパfrasの報告を聞いて、この手紙をコロサイの人々に書き送りました。それがこの手紙です。

私たちはきょうこのコロサイ2：1－7を二つに分けて学んで行きたいと思います。最初は1－5節、そして6－7節です。

2. パウロの苦闘の目的とその喜び 2：1－5

2：1 愛するコロサイやその周辺のキリスト者たちに対して、またキリスト教会のために心遣いを見せるパウロ

2：1「あなたがたとオデキヤの人たちと、そのほか直接私の顔を見たことのない人たちのためにも、私がどんなに苦闘しているか、知ってほしいと思います。」、このように書かれています。先ほども言いましたように、ここを読んで、パウロはコロサイの教会には行っていなかったけれど彼らのために働きをなしていたということを私たちは知るわけです。この1節の冒頭に「なぜなら」という接続詞を付けて読むと、1章から2章にかけての流れをより分かり易く読み取ることができます。1：28から「私たちは、このキリストを宣べ伝え、知恵を尽くして、あらゆる人を戒め、あらゆる人を教えています。それは、すべての人を、キリストにある成人として立たせるためです。：29 このために、私もまた、自分のうちに力強く働くキリストの力

によって、労苦しながら奮闘しています。』、**なぜなら**、「あなたがたとラオデキヤの人たちと、そのほか直接私の顔を見たことのない人たちのためにも、私がどんなに苦闘しているか、知ってほしいと思います。」。パウロはコロサイのクリスチャンのために、また教会のために苦闘していた、闘っていた、労していたということをして1節は教えるわけです。私たちはこの1節からパウロの姿を知ることができます。

パウロは直接会ったことのないコロサイの人々とながっていたのです。それは霊的につながっていたということです。それはこの1：24－25などを見ると、そのことがよく理解できます。1：24－25「ですから、私は、あなたがたのために受ける苦しみ喜びとしています。そして、キリストのからだのために、私の身をもって、キリストの苦しみ欠けたところを満たしているのです。キリストのからだとは、教会のことです。：25 私は、あなたがたのために神からゆだねられた務めに従って、教会に仕える者となりました。神のことばを余すところなく伝えるためです。」、1：29「このために、私もまた、自分のうちに力強く働くキリストの力によって、労苦しながら奮闘しています。」。パウロはまたコロサイの人々だけではなく、ほかの地方の人々に対してもこのような心遣いをしていました。Ⅱコリント11：29を見るとそのことがよく分かります。「だれかがつまずいていて、私の心が激しく痛まないでおられましょうか。」、パウロはひとりのクリスチャンがつまずいても心に痛みを覚えたのです。だから、だれかひとりがつまずいても、私の心は激しく痛む、このようにコリントの人々に伝えているわけです。パウロはコロサイの人々に対しても同じ思いを持っていた、そのことをこの1節から私たちは十分に知ることができます。

先ほども言いましたが、パウロは獄中にありました。獄中からこの手紙を書いたのです。そしてそのパウロの模範とする人はひとりしかいなかった。それは大牧者なるイエス・キリストです。パウロはイエス・キリストにならうことしか、獄中にあっても考えていなかった。イエス・キリストが歩んだように自分も歩む、だから獄中にあっても離れた兄弟姉妹のためにいろいろな労をしていたわけです。イエス様は、ヨハネの福音書10：11で、「わたしは、良い牧者です。良い牧者は羊のためにいのちを捨てます。」とされています。恐らくパウロもこのような心境だったのだと思います。イエス様にならうということは、自分はほかのクリスチャンのためにいのちを捨てても惜しくない、このような思いがパウロの中にもあったのだと私は思います。1節はこのパウロの姿を私たちに鮮明に教えてくれます。

2：2 パウロの苦闘の目的

そして、その愛するクリスチャンたちのために苦闘している、その目的をパウロは2節で教えてくれています。2節は、「それは…ためです。」と終わっています。パウロはこの2節で三つのことを私たちに教えてくれています。そのために自分は苦闘している、闘っている、労している。そのことをパウロはコロサイの人々に教えるわけです。

① キリスト者が「心に励ましを受ける」ため

一つはキリスト者であるコロサイの人たちが心に励ましを受けるためです。先ほども言ったように、コロサイの教会には異端の教えが入っていました。だからそういうクリスチャンを励ますために、パウロは労していたわけです。この「励ます」ということばはギリシャ語でパラカレオと言います。士気の低下した兵士に勇気を与えて再び士気を高めて闘いに立ち向かうことを意味することばです。だから、パウロはこの「励ます」ということばを用いて、コロサイのクリスチャンたちが奮い立つことを願っていたのです。そのためにパウロも苦闘していたわけです。

② キリスト者が「愛によって結び合わされる」ため

そして、パウロが苦闘していた目的の二つ目はクリスチャンが「愛によって結び合わされ」るためである、そのようにパウロは教えています。皆さんご存じのように、私たちクリスチャンにとって大切なことは霊的一致です。どんな群れにも一致がなければ、その働きは途中で崩れ去ります。空中分解します。私たちはそのことをひとりひとりの信仰生活を通してよく知っています。クリスチャンに一致が必要なことに私たちは異議を挟むことはできません。パウロもコロサイのクリスチャンたちに、愛によってクリスチャンが一致団結してその異端の教えを退けることを勧めていたわけです。またそのために自分が労しているということをコロサイの人々に知らせたかったわけです。

皆さん、私たちクリスチャンの根はどこにありますか？私たちの信仰生活の根は神の愛に根差したものではありませんか？その愛に基づくものではないですか？パウロはそのことをエペソ3：17で、「愛に根ざし、愛に基礎を置いているあなたがたが、」と言っています。私たちの信仰生活は、愛に根差し、その愛に基礎を置いたものでなければ無意味なものです。パウロはそのことをコロサイの兄弟姉妹に教え、また奮闘しているのだと言うわけです。

③ キリスト者が「神の奥義であるキリストを知る」ため

三つ目に非常に大切なことをパウロはコロサイのクリスチャンに教えています。それは、キリスト者が神の奥義であるキリストを知るためだと言うわけです。この「奥義」ということばですが、英語のミステリーです。このことばは新約聖書において28回使われていると言われています。この28回のう

ち21回はパウロが書いた手紙の中で使われています。パウロが好んでと言うよりも、彼はこの「奥義」ということばを非常に大切に使っていたということで、この「奥義」の意味は、旧約の時代には人々に隠されていたが、新約の時代になって啓示によって神から人に聖霊の働きによって解き明かされた真理のことを言います。パウロはエペソ3:3で「この奥義は、啓示によって私に知らされたのです。」と書いています。この「奥義」の具体的な内容は、それは広い意味では一言で言うならば福音のすべてです。イエス・キリストの救いです。もっと狭い意味での「奥義」というのは個々の教え、一つ一つの教えのことを言います。十字架に関して、あるいは受肉に関して、あるいは聖霊の内住に関して、あるいは再臨に関して。このようなことを「奥義」と言うわけです。この2節を見ると、「神の奥義であるキリスト」と書かれています。ですから、「神の奥義」とイエス・キリストはイコールです。

そしてその後、「真に知るようになるためです」と書かれていますが、「真に知る」、恐らく皆さん、どういう意味なのか、想像はつかれると思います。それは、頭だけで知ることではなくて、キリスト者がひとりひとりその体験を通して、そのキリスト者のうちに働くキリストの恵みと力を知ることです。

2:3 この奥義であるキリストの説明

そしてそれが3節へと続いて行くわけです。3節は「このキリストのうちに」と書かれています。だから3節は、この奥義であるキリストの説明がなされています。この3節の最後はキリストのうちに「隠されているのです。」。この「隠されている」というのも「奥義」を意味することばです。一般の人々の目には隠されているということですが、当時の異端の教師たちは救いにはまだほかの教えを付け加えるという偽りの教えを人々に説いていました。しかし、パウロはその偽りの教えを鋭く指摘したわけです。そのようなことはない、パウロはそれを攻撃しました。神の奥義はキリスト・イエスによって明らかに啓示されている、開かれた奥義であるとパウロは偽りの教師たちを攻撃したのです。キリスト者の知識、知恵はイエス・キリストから来るものです。またその知識、知恵はすべてイエス・キリストのうちにあります。だからパウロはここで「キリストのうちに、知恵と知識との宝がすべて隠されている」、このように言うわけです。その意味するところは1:26、27にも明らかです。「これは、多くの世代にわたって隠されていて、いま神の聖徒たちに現された奥義なのです。:27 神は聖徒たちに、この奥義が異邦人の間にあってどのように栄光に富んだものであるかを、知らせたいと思われたのです。この奥義とは、あなたがたの中におられるキリスト、栄光の望みのことです。」。神の奥義はイエス・キリストです。このキリストのうちに知識と知恵のすべてが含まれているのです。

2:4 キリスト者は常に主イエス・キリストの教えに忠実に従わなければならない

そして4節、「私がこう言うのは」と前の部分を受けてパウロは言うわけです。ここで「まことしやかな議論」と書かれています。これは、当時の法廷用語を使ってパウロは言うわけです。この意味するところは、「本質は劣っている」、あるいは「本質は全く違うのに上手にいろいろな論拠をそろえてよいものにしてしまうほどの説得力を持ったことば」を意味するわけです。だから本質は違うのです。でもそれをうまく言い表わして、もっともらしいことばのことです。パウロは、「私がこう言うのは、」あなたがたがそのような異端の教えに惑わされないためにこう言うのだと4節で教えるわけです。

現代もさまざまな異端があります。私たちの周りには異端があふれています。実は私もその異端に首を突っ込んだというか、ある時期、異端と近づいたことがありました。異端は物すごく優しいのです。もっともらしいのです。受けやすいのです。受け入れやすいのです。だからついキリスト教という名前がそこについていると、これも同じキリスト教かなと思ってしまうのです。でも本質は全然違います。同じことばを使っている、同じ表現をしているようでも、その本質は全然違うものです。私は体験としてそのことを知っています。だからパウロも言うのです。「私がこう言うのは」、あなたがたがその異端の教えに惑わされないためにと。

そして後半は、「あなたがたをあやまちに導くことのないためです。」、間違った方向に行かないためだとパウロは言うわけです。異端の教えは私たちを全然違う方向へ連れて行きます。だからパウロもそのことをコロサイの人々に言うわけです。私たちは、普段の生活の中でさまざまな誘惑があります。これは現実です。でも皆さん、私たちが大切にすること、私たちが考えなければいけないことはただ一つ、それはこのみことばです。私たちの生活はみことばに従ったものでなければならないということです。それは皆さんがよくご存じのことです。ほかのことに従う生活は私たちには勧められていないのです。

2:5 パウロの喜び

パウロは4節でこう述べてから、「喜んでいます」、このように5節は終わっています。パウロは何を喜んでいたのでしょう。そのような異端の教えに惑わされているコロサイの人々、そのために奮闘しているパウロ。でもパウロは喜んでいて、このように5節は終わっています。それは、先ほども言いましたが、パウロはコロサイの人々と一緒にいたわけではありませんでした。パウロはローマの獄中にあった

のです。距離的に遠く離れたところに、パウロはいたわけです。しかし、パウロの心はいつもコロサイの人々と一緒でした。パウロはほかのところでこのように述べています。Ⅰコリント5：3「私のほうでは、からだはそこにいなくても心はそこにおり」と、このように書いています。また4節では、「私も、霊においてともにおり、」と書いています。パウロはコリントの人々に対しても、私は今あなたがたのそばにいないけれども、心はいつもあなたがたといっしょにいるということをこの手紙を通して教えるわけです。コロサイの人々に対してもパウロは私はあなたがたと離れているが、いつも心はあなたがたのところにあると言うわけです。

そして、その後、何を喜んでいたか——。「あなたがたの秩序とキリストに対する堅い信仰とを見て喜んでいます。」、このように書いています。この「秩序」、「堅い」ということばですが、これは軍隊用語を使ってパウロは書いています。「秩序」とは「一致とよく規制された慣習、そして、すべての規則」、「堅い」は「強固な、堅固な」という意味です。なぜパウロがここでこのような軍隊用語を使ったかということです。軍隊は決められた規則を守って、一致して堅固な守りを築いて戦うものです。そうでなければ戦う前から敗北があります。パウロは軍隊のように、コロサイのクリスチャンたちもキリストの教えをしっかり守って、またそれを行なうという強い信仰を持っていることをエパfrasから聞いて喜んでのことです。

3. キリストにあって歩む 2：6－7

パウロはそのような喜びをもって、6－7節でコロサイの人たちにこのように歩みなさいと教えるのです。

2：6 6節は「あなたがたは、このように主キリスト・イエスを受け入れたのですから、彼にあって歩みなさい。」「このように」、これはパウロらの働きを指してもいるのでしょう。また違う働きがあったかもしれませんが。しかしこの2：2などで明らかなように、彼らはイエス・キリストを受け入れたのです。この「受け入れた」というのは能動態です。自分から進んで「主イエス・キリストを受け入れた」と書かれています。福音を受け入れた、それはイエスが主であることを受け入れ、そして信仰告白をして、キリストのからだに加えられ、新しい立場を持つ者となったということです。だから、「彼にあって歩みなさい。」、この「歩みなさい」は現在命令形で書かれています。だから「彼にあって歩み」続けなさい、キリストを主として歩み続けなさい、こういう意味です。パウロはこのコロサイの1：10でも「主にかなった歩みをして、」と、このように書いています。

2：7 どのように歩むべきか＝信仰生活

パウロはコロサイのクリスチャンたちにイエス・キリストを主として歩みなさいと教えてから、その歩み方を7節で四つ教えています。これは、どのように信仰生活を送るべきか、コロサイの当時のクリスチャンたちに送ったことばであると同時に、私たちにも適用されるものです。

① 「キリストの中に根ざし」

まず一つは「キリストの中に根ざし」です。この「根ざす」というのは皆さんよく理解できます。それは植物は地中に根を張って成長の養分を摂ります。だから、コロサイの人々にイエス・キリストからしっかりと霊的栄養分を摂って成長しなさいとパウロは言うわけです。マタイ13章で種まきの例えが書かれているのを皆さんよくご存じです。マタイ13：6ではこのようにイエス様は教えています。「しかし、日が上ると、焼けて、根がないために枯れてしまった。」、根がないと養分を摂ることができないから枯れてしまったのです。そのことを21節でこのようにイエス様が説明しています。「しかし、自分のうちに根がないため、しばらくの間そうするだけで、みことばのために困難や迫害が起こると、すぐにつまずいてしまいます。」、根をイエス・キリストに張っていないから、そこから霊的養分を摂ることができないから、困難にぶつかる枯れてしまうということです。パウロはコロサイのクリスチャンたちに「キリストの中に根ざし」、このように教えるわけです。

② 「建てられ」

そして二つ目が「建てられ」です。この前に修飾語をつけるとすれば、同じようにキリストの中に「建てられ」です。この「建てられ」という動詞ですが、これは現在形です。ということは、「建てられ」続けなさいということです。継続してそのような状態を続けなさいということです。パウロはコロサイの人々にイエス・キリストを土台として、その上に信仰生活を築き続けなさい、このように言うわけです。キリストに根を張って、キリストの上に信仰生活を建てて行く。

私たちはパウロ書簡の違うところからこのことをまた違うことばで知ることができます。Ⅰコリント3：11－15で、パウロは残る建物と焼けてなくなってしまう建物のことを書いています。それは土台の上に金、銀、宝で建てた建物、もう一つは木、草、わらで建てた建物、この例えをもってパウロは教えるわけです。それは残る建物は価値のあるものです。焼けてなくなった建物は価値のないものです。私たちは、このイエス・キリストを土台としてどのような建物をその上に建てるかです。焼けてなくな

るような建物を建てるのか、残る建物を建てるのかです。パウロはコロサイのクリスチャンに、キリストの中に建てられて、キリストを土台としてその上に自分の信仰生活を建てなさい、このようにパウロは言うのです。

③ 「信仰を堅くし」

そして三つ目が「信仰を堅くし」です。同じようにキリストの中に「信仰を堅くし」、そういう意味です。皆さんの信仰の確信、それはどこにありますか？確信のもとには自分の経験ですか？あるいは知識ですか？それともイエス・キリストが皆さんの確信の基ですか？私たちはもう一度自分の信仰の確信、それがどこから来るのか、それを考える必要があります。

イエス様はヨハネの福音書 16 : 33 で、「わたしは世に勝った」と言われています。また、ヨハネも 1 ヨハネ 5 : 5 で「世に勝つ者とはだれでしょう。イエスを神の御子と信じる者ではありませんか。」と、このように言っています。私たちは、世に勝った者です。世に勝つ力が私たちには与えられています。私たちはそれをみことばから知っているはずですが、また、私たちにはうちにおられる聖霊の助けがいつもあります。私たちはみことばには実際的な力があるということのみことばから教えられています。皆さん、よくご存じの II テモテ 3 : 16 - 17 をお開けください。ここでパウロは「聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。それは、神の人が、すべての良い働きのためにふさわしい十分に整えられた者となるためです。」と教えてくれています。私たちは知っているのです。みことばから教えられているのです。みことばには実際的な力があることを私たちは知っているのです。ただ私たちが実践しないだけです。

そして、そのみことばの実際的な力を知って、私たちは私たちの確信が揺るがないものであることも知っています。それは、ローマ 8 : 35 - 39 で、パウロははっきりと私たちに教えるのです。ここでまたパウロはこのように、私たちに私たちの確信がいかに揺るがないものであるかをこう言っています。

「35 私たちをキリストの愛から引き離すのはだれですか。患難ですか、苦しみですか、迫害ですか、飢えですか、裸ですか、危険ですか、剣ですか。36 『あなたのために、私たちは一日中、死に定められている。私たちは、ほふられる羊とみなされた。』と書いてあるとおりです。37 しかし、私たちは、私たちを愛してくださった方によって、これらすべてのことの中にあっても、圧倒的な勝利者となるのです。38 私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、39 高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。」、パウロはこう確信していると言うのです。私たちはどうですか？こう確信していますか？こう確信することができのです。なぜならみことばがこのように教えているからです。またこの確信は、私たちに後に来る報いをも教えています。

私はこのところを余り読む機会がなかったので、こういうみことばが書かれているということに疎い者でした。しかし、このところを読んで、私は私たちクリスチャンにすばらしい報いがあることをもう一度知ることができました。それはヘブル 3 : 14 「もし最初の確信を終わりまでしっかり保ちさえすれば、私たちは、キリストにあずかる者となるのです。」、そして、10 : 35 - 39 です。「35 ですから、あなたがたの確信を投げ捨ててはなりません。それは大きな報いをもたらすものなのです。36 あなたがたが神のみこころを行なって、約束のものを手に入れるために必要なのは忍耐です。37 『もうしばらくすれば、来るべき方が来られる。おそくなることはない。38 わたしの義人は信仰によって生きる。もし、恐れ退くなら、わたしのこころは彼を喜ばない。』39 私たちは、恐れ退いて滅びる者ではなく、信じていのちを保つ者です。」とあります。投げ捨ててはならないのです。確信を持って信仰生活を歩む時に私たちに大きな報いがあるのです。私たちの確信はどこにありますか？私たちの知識ですか？経験ですか？それとも本当にイエス・キリストですか？私たちはもう一度このことをひとりひとり自分のうちに問う必要があるのではないのでしょうか？

④ 「感謝しなさい」

そして四つ目にパウロは「感謝しなさい。」、このように教えています。それもその前に修飾語があって、「あふれるばかり感謝しなさい。」です。「あふれる」——器から入れたものがこぼれるのです。そのような感謝です。ぴったりと収まる感謝ではないのです。外に飛び出していく、そのような感謝です。パウロはそれを持ちなさいと言うわけです。皆さんご存じのように、私たちのうちに高慢な思いがある時に感謝はありません。皆さんも自分の経験を通してよくご存じです。でも自分が謙虚になった時に、その感謝の思いは生まれます。だからパウロはコロサイの人々にも謙虚に、そういう感謝の心を持ちなさいと言うわけです。この「感謝」はクリスチャンの大きな特徴です。皆さんよくご存じのピリピ 4 : 6 で、「何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。」、「あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願い」です。感謝は私たちクリスチャンの大きな特徴です。またイエス様もあらゆる場合に感謝を捧げました。

4. 結論

皆さん、私たち救われた者は、その以前を考えてみると、多くの人たちの働きとまた多くの人たちの祈りによって神の送りであるイエス・キリストを知りました。知った私たちはみことばから、この聖書からどのように歩んだらいいのかを教えられています。皆さんはどのように歩んだらいいのか、よくご存じです。パウロがきょうコロサイのクリスチャンたちに教えたように、キリストの中に根差し、キリストの中に建てられ、キリストの中に信仰を堅くし、そしてキリストの中に感謝を持って、このように生きる、このように歩む、それは何の疑問の余地もない、私たちが一番望む信仰生活である、このように皆さん、思われませんか？

でも私たちは、なかなかそれを実行することができないのです。でも、失敗があっても私たちはこれをあきらめてはいけません。これをしっかりと心に蓄えて、そのような歩みを主の力によってなすべきではないでしょうか？

イエス様は、ヨハネの福音書 15：5 で「わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。」とされています。わたしにとどまっていたらあなたがたは大きな実を結ぶとイエス様が言われています。いかがですか、皆さん。もう一度ひとりひとりの信仰生活を吟味して、本当に主が一番喜ばれる、そのような歩みを選択しようではありませんか。またイエス様は「わたしを離れては、あなたがたは何もすることができない」と言われていました。この中にまだイエス様を信じておられない方がおられましたら、ぶどうの木につながる枝として、イエス・キリストを受け入れるようにお勧めいたします。

《次のことを考えてみましょう》

1. 私たちの歩みを止めるものは何でしょうか？
2. あなたは「キリストにあって歩む」ことに同意しますか？
3. あなたは「キリストにあって歩む」ことを実践しようと願いますか？